国書刊行会創業50周年記念企画

真理のことばの物語集

ダンマパダ・アッタヴァンナナー

全四巻

松村淳子 訳

トゥシタ天から降らんとする菩薩。ティヴァンカ・ピリマゲ寺院壁画（12 世紀）、ポロンナルワ（スリランカ）

国書刊行会

本書の特色

❖『ダンマパダ（真理のことば）』の各詩句はいかなる理由で説かれたのか。本書は、『ダンマパダ』の詩句がブッダによって唱えられた経緯にまつわる物語の、パーリ語原典からの全訳である。

❖ブッダと出家・在家の弟子たち、王侯や市井の人々の物語が生き生きとした描写・語り口で記され、ブッダ在世時の人々や社会の息吹が伝わり、読者はその時代を目の当たりにするような感覚を抱くことであろう。

❖『ジャータカ註』がブッダの前生が中心となり動物説話のような〈子ども向けの物語〉を多く含むのに対して、『ダンマパダ註』はブッダの現在世が背景になっている〈大人向けの物語集〉である。

❖『ダンマパダ註』は説話文学の宝庫であり、また仏弟子たちのエピソードが数多く説かれるため、仏教固有名詞辞典によって出典として使用されてきた。

❖底本には、H. C. Norman(ed.), *The Commentary on the Dhammapada*, 4 vols. London: Pali Text Society, 1906 (reprint)1970 を用い、底本の巻数・頁数は［］に入れて本文中に示した。

❖現行のパーリ語辞典だけでは理解が困難な語句については、スリランカに伝承されているシンハラ語訳（*Saddharmaratnāvaliya*）と難語釈（*Dhampiyā-atuvā-gāṭapadaya*）を参照した。

❖訳註は主にパーリ語学習者や研究者が原文と照合して読むための参考として付けた。類似した物語については主にパーリ文献に限って挙げ、説話中のすべての詩句について韻律の解説をつけた。

❖索引には見出し語に簡潔な語釈を付けて、読者の便をはかった。

真理のことばの物語集

——ダンマパダ・アッタヴァンナナー 全4巻

二〇二一年十月全巻同時刊行

第一巻　定価 6820円（10%税込）
ISBN 978-4-336-07073-9

第二巻　定価 7040円（10%税込）
ISBN 978-4-336-07074-6

第三巻　定価 7260円（10%税込）
ISBN 978-4-336-07075-3

第四巻　定価 7150円（10%税込）
ISBN 978-4-336-07076-0

《造本》
A5判（二一〇×一四八ミリ）・上製カバー装
本文組＝二三級一段組
装幀＝山田英春

《訳者紹介》
松村淳子（まつむら じゅんこ）
一九五三年、静岡県静岡市生まれ。東京大学文学部卒、同大学院人文科学研究科修士課程修了。オーストリア国立大学アジア学研究科修士課程修了。ドイツ・ゲッティンゲン大学インド学仏教学専攻博士課程修了（Ph.D.）。神戸国際大学教授、国際仏教大学大学院大学教授を経て、現在、東洋大学大学院非常勤講師。
著書に *The Rasavāhinī of Vedeha Thera*（東方出版、一九九二）、訳書に『増支部経典第四巻　原始仏典Ⅲ』（服部育郎氏と共訳、東京：春秋社、二〇一八）などがある。

国書刊行会
〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL.03-5970-7421　FAX.03-5970-7427
https://www.kokusho.co.jp
info@kokusho.co.jp

■申込書
取扱店

『真理のことばの物語集』
第一・二・三・四巻 を各　　部申し込みます。

お名前　　お電話

ご住所

＊必要事項をご記入の上、最寄りの書店へお申し込みください。

■刊行にあたって

パーリ語仏教説話の面白さと意義

松村淳子

日本には、最初から大乗仏教が伝わったため、多くの人々は「大乗は他者の救済を目指し、小乗は修行者だけの救済を目指す」という偏った見方が根付いてしまっている感がある。しかし、いわゆる小乗の文献に表れるブッダの考えは、決してそのように単純な括り方ができるものではなく、在家信者だけでなく未信者や外道さらには悪人に対しても、覚りへ導く方法を常に探っておられる。ブッダの説いた教えの根本的な精神は大乗仏教にも受け継がれている、と私は考える。

ここに和訳した説話集は、いわゆる上座仏教（小乗仏教）の聖典の一つ、『ダンマパダ（真理のことば）』という詩句集に伴う物語群である。『ダンマパダ』自体は、中村元先生の『真理のことば』（岩波文庫）を始めとして多くの和訳があるが、その註釈として語られている物語と一緒に読むと、また一味違った意味合いをもって浮かび上がり、理解されるように感じる。

よく「仏教とは何かわからない」と訊かれることがあり、簡単に一口では説明できないので困惑するが、仏教に関心を持つ人々が多い証拠だと思う。仏教説話は説法師が法話を説くのに用いられたもので、興味深い物語を伝えているという点では、いわゆる小乗にあたる初期仏教の文献の方が圧倒的に優れている。よく知られているのは、ブッダが前世に菩薩であったときの物語『ジャータカ註』であるが、動物説話が多く（イソップ物語などと共通するものもある）、ブッダの時代の話はおまけ程度にしか出てこない。それにたいして、本書はブッダが覚りを開いた後の在世時代が対象となっており、ブッダを取り巻く人々のリアリティに富む物語が主体となっている。従って、内容も現実的な問題に直結するようなものが多い。「仏教とは何か」という疑問を持っておられる方々にとって本書の物語類は、仏教の基本的な考え方や生活の様相を理解するには格好の素材となるのではないかと思う。

加えて私を魅了したのは、パーリ語原文の編著者であるブッダゴーサの筆致の巧みさである。会話文を次々と繋ぐ文体は、生き生きとした臨場感を与えている。そこで訳すにあたっては、原文の簡潔ながら巧緻な味わいを損なわないことを心掛け、すべての語を漏らさず訳しつつ、余計な修飾的文体は使わないようにした。この私の試みが翻訳文として成功していることを願う。一方で専門家向けに各巻末に註釈を付けて、さらなる研究の一助となるように意図した。

本文はすらすらと楽しみながら読みつつ、ブッダの法（真理）がどのように説かれ、弟子たちがいかに実践したかを理解する一助になることを、切に願っている。

■推薦文

物語を通して伝承される仏教

大正大学客員教授、東京大学名誉教授　島薗進

ブッダの教えを物語の形で伝える文書集成は早くからなされたが、南方上座仏教系のものは、日本では必ずしも読みやすい形になってこなかった。この『ダンマパダ註』に収められた物語群は、人々の間でブッダの教えがどのように受け止められてきたかを生き生きと伝えている。

ここにはさまざまな境遇にあるたくさんの人物や、ときには動物までも登場し、悩みや恨み、喜びや思いやり、弱さや愚かさ、傲慢さや強欲ぶり、そして賢さや謙虚さを露わにしている。また、悔い改めや気づき、感謝の心を示して、読者に自らの心を省みるよう促しもする。時代と場所の隔たりを感じさせない。

大乗仏教の経典や伝承を通して、あるいは近代になってからの仏教研究を通して、すでに日本人に身近になっているものもそこここに見出される。だが、アーナンダ、サーリプッタ、デーヴァダッタなど、既知の登場人物も新たに豊かな表情と性格をもって姿を現すだろう。日本で周知の仏典には現れない無名の女性や少年や象（無名に決まっているが）の物語に出会い、読者は彼らの素朴な悩みや回心に、そして心あるふるまいに共鳴するだろう。

そして何よりブッダと仏教（仏法＝ダルマ）について、新たに考え直し、捉え直す機会を得るのではないだろうか。宮澤賢治がそう考え実践したように、物語を通してこそ深く理解し身につくものがある。仏教はさまざまな物語を通して伝えられてきたし、これからも伝えられて行く宗教であることを、あらためて教えてくれる書物でもある。

深い学識の裏づけと南方仏教文化への親しみを土台に、パーリ語のテクストをわかりやすく、かつ香気ある日本語に訳出され、私のような仏典にさほど明るくない者にも、また仏典研究の専門家にも助けになるような註を付して下さった訳者に感謝したい。

一般読者にも専門家にも有益な全訳

京都文教大学学長　平岡聡

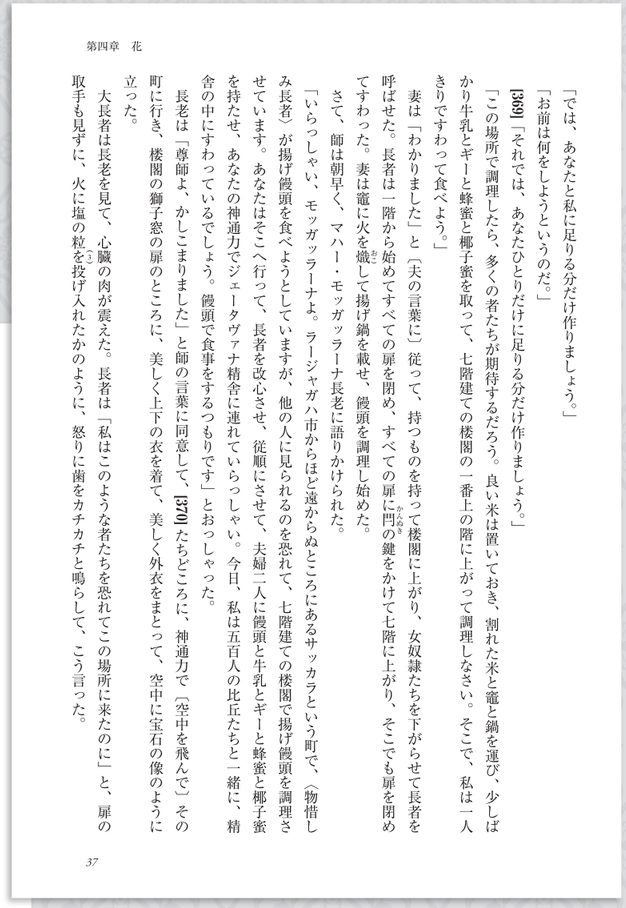
古代インド仏教文学の宝庫の扉がまた開かれた。ヨーロッパの大学で仏教文献学をおさめたパーリ仏教研究の泰斗・松村淳子氏によって『ダンマパダ・アッタカター』の物語部分の全訳全四巻が同時に刊行されたからだ。

この文献は初期経典『ダンマパダ』（ブッダの教えを易しく詩句でといた経典）の註釈書であり、その詩句が説かれるに至った因縁を解き明かす物語集である。同じパーリ語の物語集に『ジャータカ註』（ブッダの本生譚）があるが、これはイソップ寓話にも比せられるように、子ども向けの物語を多く含み、またブッダの前世を扱うのに対し、『ダンマパダ註』はブッダ在世当時を背景とする大人向けの物語集と言える。

さて、仏教文献の翻訳にはさまざまな難題がつきまとう。その一つは、大部なものの場合、部分訳か抄訳に終わってしまい、全体像がつかめないことがある。もう一つは、誰を対象に翻訳するかという点だ。専門家を対象にすれば、一般読者は置き去りにされてしまうが、一般読者を対象にすれば、専門家にはまったく物足りない内容となる。

しかし、このたびの松村氏の偉業は、これらの難題を見事に解決している。本書は大部な文献ではあるが、全訳全四巻の同時刊行であるため、全容の把握が一気に可能になる。また翻訳に際しては、従来、参照されなかったシンハラ語訳や難語釈をも参照し、熟れた日本語になっているので、一般読者も抵抗なく読み進められる。一方で、詩句の韻律の解説や平行話の存在を註記するなど、専門家のニーズにも充分堪えうる内容となっている。

本書が、仏教の初学者や専門家はもちろん、ひろく文学に興味のある一般読者や研究者にとっても有益であることは間違いない。



第四章　花

「では、あなたと私に足りる分だけ作りましょう。」

「お前は何をしようというのだ。」

[369]「それでは、あなたひとりだけに足りる分だけ作りましょう。」

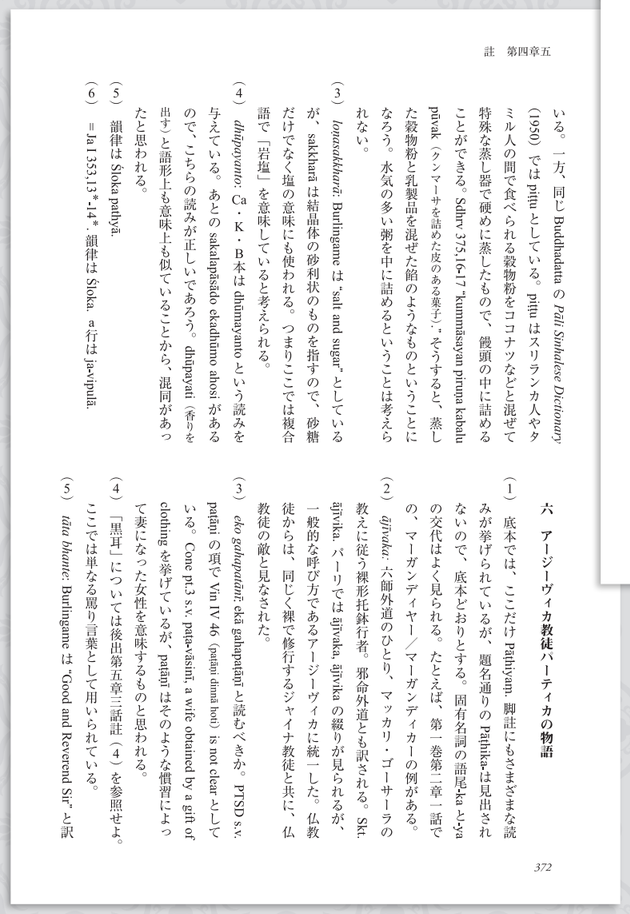
「この場所で調理したら、多くの者たちが期待するだろう。良い米は置いておき、割れた米と竈と鍋を運び、少しばかり牛乳とギーと蜂蜜と椰子蜜を取って、七階建ての楼閣の一番上の階に上がって調理しなさい。そこで、私は一人きりですわって食べよう。」

妻は「わかりました」と〔夫の言葉に〕従って、持つものを持って楼閣に上がり、女奴隷たちを下がらせて長者を呼ばせた。長者は一階から始めてすべての扉を閉め、すべての扉に門の鍵をかけて七階に上がり、そこでも扉を閉めてすわった。妻は竈に火を熾して揚げ鍋を載せ、饅頭を調理し始めた。

さて、師は朝早く、マハー・モッガッラーナよ。ラージャガハ市からほど遠からぬところにあるサッカラという町で、〔物惜しみ長者〕が揚げ饅頭を食べようとしていますが、他の人に見られるのを恐れて、七階建ての楼閣で揚げ饅頭を調理させています。あなたはそこへ行って、長者を改心させ、従順にさせて、夫婦二人に饅頭と牛乳とギーと蜂蜜と椰子蜜を持たせ、あなたの神通力でジェータヴァナ精舎に連れていらっしゃい。今日、私は五百人の比丘たちと一緒に、精舎の中にすわっているでしょう。饅頭で食事をするつもりです」とおっしゃった。

長老は「尊師よ、かしこまりました」と師の言葉に同意して、**[370]**たちどころに、神通力で〔空中を飛んで〕その町に行き、楼閣の獅子窓の扉のところに、美しく上下の衣を着て、美しく外衣をまとって、空中に宝石の像のように立った。

大長者は長老を見て、心臓の肉が震えた。長者は「私はこのような者たちを恐れてこの場所に来たのに」と、扉の取手も見ずに、火に塩の粒を投げ入れたかのように、怒りに歯をカチカチと鳴らして、こう言った。



註　第四章五

いる。一方、同じ Buddhadatta の *Pāli Sinhalese Dictionary*（1950）では pitiu としている。pitiu はスリランカ人やタミル人の間で食べられる穀物粉をココナツなどと混ぜて特殊な蒸し器で硬めに蒸したもので、饅頭の中に詰めることができる。Sdhrv 375,16-17 "kummāsayan pituṇa kabalu pūvak（クンマーサを詰めた皮のある菓子）"。そうすると、蒸した穀物粉と乳製品を混ぜた餡のようなものということになろう。水気の多い粥を中に詰めるということは考えられない。

(3) *loṇasakkharā*: Burlingame は "salt and sugar" としているが、*sakkharā* は結晶体の砂利状のものを指すので、砂糖だけでなく塩の意味にも使われる。つまりここでは複合語で「岩塩」を意味していると考えられる。

(4) *dhūpayanto*: C・a・K・B本は dhūmayanto という読みを与えている。あとの *sakalapāsādo ekadhūmo ahosi* があるので、こちらの読みが正しいであろう。dhūpayati（香りを出す）と語形上も意味上も似ていることから、混同があったと思われる。

(5) 韻律は Śloka pathyā.

(6) = Ja I 353,13*-14*. 韻律は Śloka. a 行は ja-vipulā.

六　アージーヴィカ教徒パーティカの物語

(1) 底本では、ここだけ Pāṭiyam. 脚註にもさまざまな読みが挙げられているが、題名通りの Pāṭhika-は見出されないので、底本どおりとする。固有名詞の語尾 -ka と -ya の交代はよく見られる。たとえば、第二巻第三章一話での、マーガンディヤー／マーガンディカーの例がある。

(2) *ājīvaka*: 六師外道のひとり、マッカリ・ゴーサーラの教えに従う裸形托鉢行者。邪命外道とも訳される。Skt. ājīvika. パーリでは ājīvaka, ājīvika の綴りが見られるが、一般的な呼び方であるアージーヴィカに統一した。仏教徒からは、同じく裸で修行するジャイナ教徒と共に、仏教徒の敵と見なされた。

(3) *eko gahapatāṇī*: eka gahapatāṇī と読むべきか。PTSD s.v. paṭāṇī の項で Vin IV 46（paṭāṇi dinnā hoti）is not clear as to the ... clothing を挙げているが、paṭāṇī はそのような慣習によって妻になった女性を意味するものと思われる。

(4) 「黒耳」については後出第五章三話註（4）を参照せよ。ここでは単なる罵り言葉として用いられている。

(5) *ādāṭa bhaṇe*: Burlingame は "Good and Reverend Sir" と訳

組見本（70%縮小）

収録内容

第一巻
まえがき
プロローグ
第一章　ひと組ずつ（第1～20偈）
第二章　不放逸（第21～32偈）
第三章　心（第33～43偈）

第二巻
第四章　花（第44～59偈）
第五章　愚か者（第60～75偈）
第六章　賢者（第76～89偈）
第七章　阿羅漢（第90～99偈）
第八章　千（第100～115偈）

第三巻
第九章　悪（第116～128偈）
第十章　暴力（第129～145偈）
第十一章　老（第146～156偈）
第十二章　自己（第157～166偈）
第十三章　世間（第167～178偈）
第十四章　ブッダ（第179～196偈）
第十五章　楽しみ（第197～208偈）
第十六章　愛しいもの（第209～220偈）
第十七章　怒り（第221～234偈）
第十八章　汚れ（第235～255偈）

第四巻
第十九章　法の実践（第256～272偈）
第二十章　道（第273～289偈）
第二十一章　さまざまなこと（第290～305偈）
第二十二章　地獄（第306～319偈）
第二十三章　象（第320～333偈）
第二十四章　執着（第334～359偈）
第二十五章　比丘（第360～382偈）
第二十六章　婆羅門（第383～423偈）
エピローグ
註
『ダンマパダ』偈出現箇所一覧
総索引